

The 19th ICO—Optics for the Quality of Life—に参加して

The 19th General Congress of the International Commission for Optics (ICO)—Commission Internationale d'Optique (CIO)—が、去る8月25日から6日間のスケジュールでイタリアのフィレンツェにおいて開催されました。会議のテーマは、“Optics for the Quality of Life”という非常に魅力的なもので、参加者も300人を超えて非常に盛況でした。本会議は、1948年に第1回の会議がオランダで開かれて以来、光学の普及と進展を目的として50年も続く国際的な会議で、3年ごとに開催されています。光学の普及のために、例えば今回の会議では、経済情勢が厳しい国からの参加者には、参加に対する補助が出されていたともお聞きしました。ICOは、その性格上、毎回各国から著名な先生方がお集まりになります。そのため、チュートリアル講演などで貴重な講演をまとめて聞くことができることもあり、本質的なディスカッションを求めて積極的に参加される方も多いようです。

筆者は、1994年に京都で開催されたICOのTopical Meeting（筆者がはじめて参加した国際会議でもありました）に参加して以来、韓国のテジョン、米国のサンフランシスコ、そして今回のフィレンツェと実は皆勤です。また、インド光学会の25周年記念としてインド北部の街、デューラダンで開催されたInternational Conference on Optics and Optoelectronics (ICOL '98)にも出席させていただき、大変印象深いものとなっています。その際に知り合ったインドの研究者と今回4年ぶりに再会することができ非常に嬉しく思いました。こうしてみると、個人的にも大変お世話になってきたICOの会議についての参加報告を書かせていただける機会を得ましたことを非常に光栄に思います。

今回の会議の開催地であるフィレンツェは、人口は約45万人のトスカナ州の州都であり、13世紀から15世紀にかけてあらゆる分野で発達を遂げ、科学と芸術を育んだルネサンス発祥の地であり、かの有名なメディチ家の本拠地でもあります。近くには、ガリレオの実験で有名なピサの斜塔もあります。また「花の都」として知られるこの街には歴史的建造物や美術館はもちろん、街角のふとした光景からも、芸術の香が漂ってきます。メディチ家に最初の隆盛をもたらしたコジモ・イル・ヴェッキオ（コジモ・デ・メディチ）科学に関するコレクションを集めた科学史

博物館には、ガリレオ・ガリレイの望遠鏡をはじめ、光学・天文学・宇宙観測学に関する諸装置などが所蔵されています。まさに光学の起源を感じる街でもあります。

会議初日のゲットトゥゲザーパーティーや二日目のプレナリートークは、国際会議場（Palazzo degli Affari of the Congress Center）で行われました。三日目以降のテクニカルセッションは、中心街からバスで30分のフィレンツェ大学のサイエンスキャンパス内で行われました。300人を超える参加者の中、日本からの参加者数がイタリアに続いて2番目の70人弱だったことは、数の多さの良さ悪しの議論は別として特筆すべきことです。ちなみに3番目はお隣の国、スペインからの参加だったということです。日本光学会は、ICOの定める国際的な団体の条件を満たしていないのでICOの正式な会員ではないそうですが、参加人数的には十分にその活動に貢献しているといえるかもしれません。グローバル化が進んだ今日、学会運営のいろんな面での枠組みの見直しも必要なのかと感じました。

プレナリートークは、ヨーロッパでの光学教育の問題から、最近の非常にホットな話題でもある「ナノフォトニクス」や「光を止める話」など内容が多岐にわたっており、充実した内容ということだけでなく聴衆を飽きさせないという意味においても非常によい構成になっていたように感じました。毎年選ばれるICOプライズには、1999～2001年までの表彰者として、順にProf. H. Thienpont（ベルギー）、Prof. S. W. Hell（ドイツ）、Prof. N. A. Riza（パキスタン/アメリカ）が表彰を受けられていました。また、2001年のガリレオ・ガリレイ賞には、Prof. K. Singh（インド）が表彰を受けられていました。

テクニカルセッションの内容は、統計光学から先端光通信まで多岐にわたっており、それらの詳細な内容については誌面の都合上により、割愛させていただきます。ICOの会議の中でもともとテクニカルセッション自体は、オプション的な位置付けであったように聞いていますが、内容的には興味深いものも多く、個人的には満足しました。ただし、少し残念に感じたのは、今回はテクニカルセッションのマネージメントが少しルーズであったように感じました。また、ヨーロッパスタイルで、ランチの時間を十分に



図1 フィレンツェの町並み。



図2 プレーナリトークの様子（国際会議場）。

長くついていたのはゆったりとしてよかったのですが、それがセッションの参加者数の減少に影響していたようにも思います。講演のキャンセルもかなり目立っており、会場に缶詰めになるのを嫌ってか（会場は市街からかなり離れています）、テクニカルセッションへの出席はもうひとつというところでした。参加者の中には、しっかりした発表の内容や準備に見合う「場」が得られなかったことに対する多少の落胆の意を示す向きもあったように感じました。数より質という意味では、逆に本当に興味ある聴衆が参加していたともいえます。ICOは、EOS、OSA、SPIEなどの巨大会を会員に従える由緒正しい委員会でもあり、また「光学の普及」を目的とする委員会でもあるので、せっかくテクニカルセッションを設けるのであれば、もう少し工夫をしてもよいのではと感じました。必ずしも通常の国際会議と同じでなくても構わないと思いますが、何かICOらしい特色をもっと出せるといいように感じました。少しルーズな雰囲気のあるテクニカルセッションの中で、時間をきちんと守って進行されるキャノン(株)の田中氏の座長は、非常に気持ちが良いものでした。しかし、会議中に感じたそんな生真面目な思いも、バンケットの美味しい料理とワインが進むにつれてどこへやら、「非常によい会議だったなあ」というよい印象だけが残る、ほ



図3 会議場の前で（サイエンスキャンパス）。

ろ酔い加減になっていきながら「よかったよかった」と妙に納得してしまうバンケットでした。バンケットの席では、今回の会期中に行われた役員選挙の報告がありました。前々委員長として今期までICOの活動にご尽力された北海学園大学の朝倉先生は、今回で役職の任期を満了された、とお聞きしました。今後もICOの活動にはコミットしていただけることと存じますが、ひとまずこの場をお借りしてこれまでの先生のご尽力に感謝の意を表したいと思います。次の委員長には、スイスのヌシャテル大学のProf. R. Dändlikerが選出されました。日本からも、複数名から構成される副委員長のお一人として、群馬大学（元理研）の山口先生が選出されました。

今回ICOの会議で訪れたフィレンツェの町並みは、観光的な側面もあると思いますが、ヨーロッパの他の都市がそうであるように中世ヨーロッパの状態をよく保存していました。新しいものは、いずれ古くなり過去の仲間入りをしていきます。当たり前のことではありますが、目新しいものに飛びつくことだけが次につながるとは限りません。自分のオリジナルを信じてこつこつと進めていくヨーロッパの粘り強さ・底力とともに、歴史を経て淘汰されたものを確実に残してきたことへの自信が感じられました。過去と現在と未来が同居している町並みの中で、現在の自分の存在が不思議な現実味を帯びてくるように感じられました。といったことで、筆者にとってはいろいろ考えさせられる有意義なICO 19thへの参加となりました。最後になりますが、会議中にいろいろお世話になりました多くの先生方に感謝の意を表したいと思います。

この記事に関するお問い合わせは kato@optsun.riken.go.jp もしくは tanida@ist.osaka-u.ac.jp までお寄せください。
(大阪大学・小西 毅)